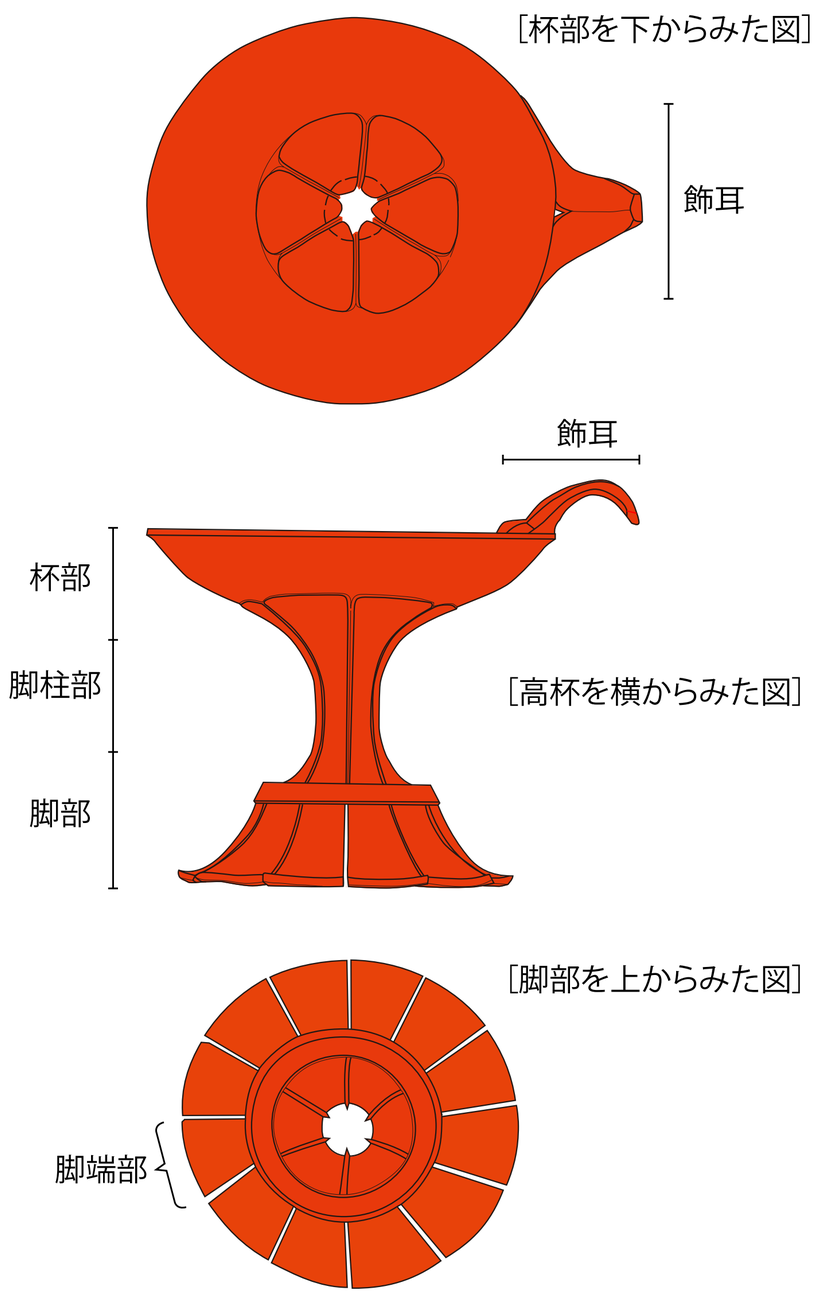
花弁文様をもつ木製高杯

青谷上寺地遺跡では、弥生時代後期（約 1800 年前）になると、杯部の下の面に花びら（花弁）のような放射状の浮き彫りが彫刻された美しい木製の高杯が現れます。この高杯を「花弁高杯」と呼びます。

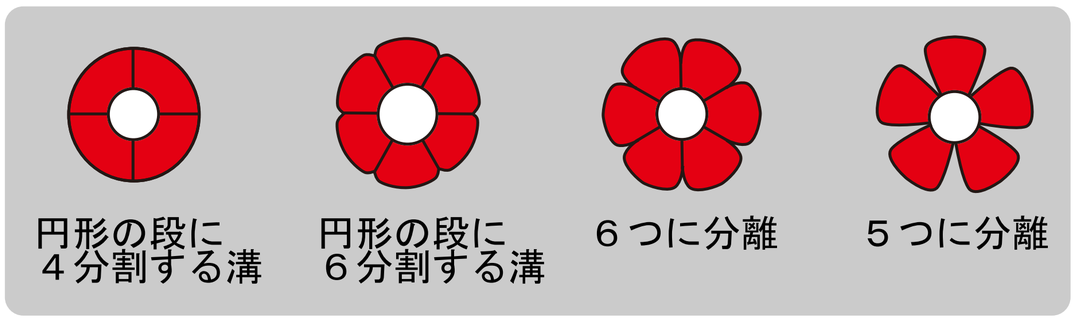
花びらに見える浮き彫り部分の形状は４弁、５弁、６弁の３種類があります。花弁のデザインは、元々円とそれを分割する線から発展したものと考えられ、４弁⇒６弁⇒５弁の順に幾何学的に高度になっていきます。

杯部の口縁部には、外側に派手に飛び出す飾耳が付きますが、そのデザインは個体によって異なり、同じ飾耳は見られません。また水銀朱を成分とする顔料で全体が赤く塗られ、より華やかに彩られています。

花弁高杯は、青谷上寺地遺跡以外では、鳥取市の松原田中遺跡、乙亥正屋敷廻遺跡、青谷横木遺跡の３遺跡のほか、石川県、兵庫県、島根県、福岡県の日本海沿岸部の遺跡から見つかっていますが、青谷上寺地遺跡からは最多の 10 点以上が出土しています。青谷上寺地遺跡で作られた花弁高杯が、日本海沿岸各地に交易品としてもたらされ、そこで有力者の権威を高める象徴として、祭りや儀礼等で使われたのではないかと考えられています。



花弁高杯見取り図



花弁文様のパターン

花弁高杯が見つかった遺跡

花弁高杯（青谷上寺地遺跡出土）